

水戸ひねき監督と語る

水戸 ひねき
波多野 ゆかり
中澤 千磨夫

中澤 ご紹介いたします。今日ご覧いただいた『脳の休日』（一九九六年）、『ホームシック』（二〇〇〇年）、

『ブラックリボン』（一九九九年）の水戸ひねき監督です。

水戸 どうもー。（拍手）

中澤 水戸さんは、北海道士別市のご出身で、札幌大学の映画研究会で活動しておりました。『ストレンジハイ』（一九九三年）という作品で、ぴあフィルムフェスティバル（PFF）のグランプリを受賞して、プロの道を歩み始めました。短い時間ですが、今日は先ほど観ました作品を中心に、お話をうかがっていききたいと思います。

そしてもうおひと方。波多野ゆかりさんです。（拍手）波多野さんは、『ホームシック』のプロデュー

サーとして、急遽、本日のトークに加わっていただくことになりました。と申しますのは、文化人類学者で札幌大学学長の山口昌男さんが、どたキャンということになりました。波多野さんにはつい先ほどお願いして、参加していただくことになりました。札幌大学は今、入学試験の最中だそうで、山口さんは抜け出してこられるおつもりだったようですが、どうしても駄目と禁足状態になっているとのことです。今日の日程は昨年十二月に決めたので、入試の日と重なることは分かっていたはずですが、抜け出せると思っていたのは、いかにも山口さんらしい（笑）。山口さんからはメッセージが入っておりまして、才気あふれ、前途有望な新人監督を皆さんで是非応援してやってくれということ。こちらの方は、山口さんらしくなくちょっとおとなしい（笑）。

山口昌男さんの話を楽しみにおられた方も大勢いらっしゃるでしょうから、企画者の私からもお詫び申し上げます。入場料を返せといわれられないように進めなければと、ちょっと緊張しております。波多野さんは、私たち札幌や夕張、石狩の映画仲間の中心的存在でして、皆、ゆかりネーサンと呼んで慕っております。私も秘かに、ではないか、懂れているのですけれども（笑）。早川渉監督の『7／25』（一九九八年）のプロデューサーでもありました。

今日は水戸さんの作品を三本観ていただいたのですが、まず、最後に観た『ブラックリボン』の話から始めましょう。

主演の女優さんは『ホームシック』と同じ小野原亜希さんですね。小野原さんとの出会いあたりからお聞きしましょうか。

水戸 知りあったきっかけは、東京の友人で田部宏太郎君という自主映画の監督がいて、その人が撮った『タカラナイス』（一九九七年）という映画を僕がお手伝いした時に、小野原さんが出演していました。なんか可愛かったので、僕が映画を撮る時には出て下さいと頼みました。

作ったのは『ホームシック』が先でして、その撮影中に、テレビの企画で五分ものを撮らないかという話がきまして、同じ二人、小野原さんと小宮山浩君を使おうと思ったんです。

中澤 小野原さんの服装が『ホームシック』の時とかなり似てるなど、私は気になっていたんですが。

水戸 テレビでマチルダを観ているところは、全く同じ服装をさせています。

中澤 遊んでいるわけですね。

水戸 ええ。『ブラックリボン』の撮影は一九九九年の一月で、『ホームシック』はまだ出来ていなくて、春ころには公開したいなと思っておりまして、宣伝になるかと同じ服を着させたわけです。でも、結局『ホームシック』の完成は延びてしまいました。

中澤 『ブラックリボン』は、テレビ東京で放映されたんですね。

水戸 はい。

中澤 これは、オムニバスですか。全体のコンセプトはどんなものだったんですか。

水戸 東京だけでやっていた三十分の情報番組があって、女の子が街を歩いて、いろんな所を紹介している間に一本、五分間ドラマが入るというものでした。なんか予算もなくてですね、ギャラ込みで十五万くらいでして、二日間で自由に撮らせてもらったというものです。ギャラなんか残るわけもないですね。

中澤 わりと評判が良くてですね、視聴率は〇・一パーセントとかだったんですけども。(会場笑)
深夜枠ですか。

水戸 はい。テレビで観た人はほとんどいないと思うんですけども、その後、BOX東中野という映画館でレイトショーでかかりました。雑誌とかでも宣伝してくれましたので、お客さんが結構来てくれました、評判が良かったです。

中澤 テレビでは、オムニバスではなく、ドラマは毎週単発ということですね。

水戸 そうです。劇場公開の時はドラマだけまとめて十二本やったんです。

中澤 みんなこんなブラックな感じなんですか。

水戸 いや、すごく展開の早いのは、僕だけで。リアルなものとか、短篇らしい短篇が多かったんですけども、僕の場合は、長編のような話を無理やりつめたというか。

中澤 チーンと鐘が鳴って人が死んでいくというのは、すぐに展開が読めてしまいますよね。分かっちゃって悪いわけではないですよ。その繰り返しが心地よいといえますか。最後は大笑いですよね。

最初に死ぬヨシオの線香立てに指も立ってますよね。あれは。

水戸 (ヨシオの身ぶり) オッケー、オッケーという(笑)。

中澤 ですよ。そういう細かな遊びが実にいいですね。『ストレンジ ハイ』の水戸さん演じる学生の部屋に置いてある小物とか。

水戸 撮影に使う遺影は普通、結構綺麗に撮っちゃったりするんですが、リアルな記念写真から切りとった

感じをわざわざ出そうとしました。画面が暗くてちょっと観ずらかったかもしれませんが、それでも。

中澤 次に『脳の休日』の話をしましょう。一九九六年のゆうばり国際冒険ファンタスティック映画祭のオシアターのグランプリ、一等賞の作品ですね。

水戸 はい。

中澤 ゆうばりファンタに出された経緯など、少しお話して下さい。

水戸 『脳の休日』の前に『ストレンジハイ』という八ミリ映画がありまして、九三年のPFFアワードのグランプリを取って、そのスカラシップで映画を撮ることになりました。しかし、企画が通らなくて、仕様がなく、自分でなんとか映画を撮ろうと、意地になって作ったのが『脳の休日』です。

中澤 『ストレンジハイ』はデビュー作とっていいですか。

水戸 劇場公開は、札幌のシアター・キノでしたので、劇場公開作という意味ではデビュー作ですね。

中澤 札幌大学でロケをした作品で、当時私も札大で非常勤講師として教えておりました、よく知っているトイレの中で、水戸さんが血まみれになったりする(笑)。

『脳の休日』にも細かなところで、色々面白い点があります。でも、なんといっても、階段でしょうかね。階段がこの作品のキーだと、私は思っているんですね。冒頭のところで、拾ったテレビを運んでいくのが階段ですよ。『ホームシック』では卒塔婆の階段落ち(笑)。いきなり難しくなってしまうかもしれないけれども。階段を意識的に使われているというのは。

水戸 それは、『アンタッチャブル』(一九八七年)の真似をしようと思ったんです。(会場笑) スローモー

ジョンで落ちていくところを。その元になった『戦艦ポチョムキン』（一九二五年）は、それよりあとに観たんです。（会場笑）

中澤 それよりってのは、どのあと。

水戸 『脳の休日』より前には観ていたと思うんですが、なんかめざしたのは、やっぱり『アンタツチャブル』でした。階段落ちという設定がまずあって、ビデオで階段落ちのある作品をまとめて観ました。深作欣二監督の『蒲田行進曲』（一九八二年）では、本当に落ちている。（会場笑）大林宣彦監督の『転校生』（一九八二年）では、横になって転がっているとか。間に空き缶とかはさまって、うまくへこませていたり。それで、間に百円玉飛んでいるところを入れたり。

いろんなビデオでチェックして、なんとか階段落ちを成立させようと思いました。

中澤 もちろん今日いらして下さった方々の中には、エイゼンシュテイン監督の『戦艦ポチョムキン』をご覧になった方も大勢いらっしゃると思います。釈迦に説法とは思いますが、オデッサの階段と呼ばれる映画史上有名な階段落ち。明から暗へ。コザック兵が市民を銃撃するというドラマスティックな転換。母親が撃たれ、乳母車がゆっくりと階段を落ちていく。それを、デ・パルマ監督がアル・カポネ対エリオット・ネスというドラマの中でパステイ・シュするわけですね。それは、もちろんエイゼンシュテインに対するオマージュでもあるんです。

水戸さんは、小津安二郎監督の『風の中の牝鷄』（一九四八年）はご覧になりましたか。

水戸 いや、観てないです。

中澤 監督にもお聞きしたことがあるんですが、小津はあんまり観てないんですか。

水戸 『東京物語』くらいしか観てないんです。

中澤 あとでまた触れることになると思いますが、水戸監督の作品には小津のテイストを感じるんですね。

家族というテーマ自体もそうなんだけれども、階段落ちにしたところで、『風の中の牝鶏』ということになる。実際にはスタントを使っているのですが、田中絹代演ずる妻が、佐野周二演ずる夫ともみ合って凄まじい階段落ちとなります。日本映画最高の階段落ちだと、私は思っております。

結局、階段というのは上と下、下と上とで運命が分かれていくということ、境界であるわけですね。水戸さんの映画では、『脳の休日』から『ホームシック』につながっているんですけども、家族とか血の問題にもなってくる。『脳の休日』では、高校生の時にお母さんを突き落としたなんていう恐い話になっている。前後に二つの空ショット、階段を見上げたショットと俯瞰したショットが挿入されるという。これはもう小津です（笑）。台詞まわしにしても、棒読みに近いのは、小津なんだな。

水戸 あれは、台詞はもう間違えずにいらえば、それでいいんで。（会場笑）

中澤 この辺から波多野さんにも加わってもらいましょう。波多野さんは、水戸さんとどのように出会ったのですか。

波多野 道ばたでばったり会ったという（笑）。『脳の休日』が出来た九五年には、まだお会いしていませんでした。『ホームシック』の撮影が九八年の秋というか、初冬だったので、その一年ほど前に、早川渉監督の『7/25』の撮影に東京に行かねばならず、その時のスタッフに水戸監督を紹介してもらって

東京の現場で初めて合流したわけです。

中澤　どんな印象だったですか。

波多野　当時はまだ作品も観ていなかったのですが、札幌の監督と同世代、それから私のやや下、四つ五つくらい下の世代の人たちに絶大な人気があって、実は評判は聞いていたんですよ。名前だけは聞いていたんで、どんなパワーがある人なんだろうと思いきや、会うと意外と自然体で、いい感じでたたずんでいたというのが第一印象でした。

中澤　監督の方は。

水戸　現場ではそんなに話をする機会もなくて。飲み会で、プロデューサーだっていうんで、これは捕まえておかなきゃと思って。(会場笑)

波多野　たしかその東京撮影打ち上げの飲み会の時に、何かけしかけたかもしれないですね。いや、酔った勢いというか。いうのは勝手なもんで。撮りたいなら、とっとと作れとか。そんな記憶があります。

中澤　でまあ、『ホームシック』では、波多野さんはプロデューサーとして関わることになるんですが、そこらあたりをもう少し。

波多野　ええとですね、映画のプロデューサーって何をしているのかきっと分かりずらいと思うんですが、本来でしたらスタッフを始め色々な人たちを主宰していく役割なんですよね。その準備のためには色々なことをしなくてはいけない。それ以外にも本来ならば資金の調達とか、企画や本を持ってスポンサーを探して歩くとか。しかし、『ホームシック』では私があまりその辺のことをしてあげられなかったとい

うのが現状でして、資金繰りに関しても監督のご家族をわずらわせてしまった。今回私がやっていたのは、現場においてちょっとした手助けと、あとは協賛を得るですとか、現像など仕上げの予算交渉をするとかぐらいです。

中澤 群馬県でのロケが入っていますけれども、あとは北海道、土別と石狩と。

水戸 幌加内。

中澤 どのくらいの撮影期間ですか。

水戸 まる一ヶ月くらいですね。

中澤 秋。

水戸 ええ。十月いっぱい。

中澤 波多野プロデューサーもおっしゃっていましたが、きわめてファミリーな作品ですよ。エンディングクレジットで気づかれた方もおいででしょうが、水戸家、総かどうかは分からないけれども、出演の(笑)。

水戸 姉が二人いるんですが、これは出ていなくて、両親が。

中澤 『脳の休日』の両親が、監督のお父さん、お母さんですね。『ホームシック』の方では、これは監督から。お父さんが。

水戸 死んだ老人。(会場爆笑)

中澤 父親を殺してしまったという、とんでもないことで。資金面でもずいぶん協力されたということです

が、出たがるというのはどういうことなんでしょうね。

水戸 頼むたびに、嫌だ嫌だといいつつ（笑）。『脳の休日』の時は、本当に嫌だったみたいですけれど。

『ホームシック』の撮影では、奥村公延さんが土別の僕の実家に泊まられていて。

中澤 奥村公延さんは、主役の中村ですね。

水戸 はい。その奥村さんが有名になったのが、『お葬式』（一九八四年）という映画でした。奥村さんが死んだおじいさん役でして、死体としてだけの出演なんですね。それで、僕の父に死人役の極意を。（会場爆笑）そんなこともありまして、結構乗ってくれました。

中澤 『お葬式』は伊丹十三監督の監督デビュー作ですね。葬儀屋はたしか江戸家猫八。『ホームシック』では、そのほかにも篠原哲雄監督が人形の宇宙飛行士の声で参加していたり、いろんな人の協力を受けていますね。鶴見辰吾さんも中村の若い時の役で。教え子をかどわかすのか、かどわかされるのか。

水戸さんが監督になっていくという経緯が面白いんですね。その辺をコンパクトにお願い出来ますか。元々、札大で映画を撮っていて、五年間通って、見事に卒業しなかった（笑）。

水戸 最後の年に残っていた単位は語学で、午前中一講目とかで、どうしても出られなかった。（会場爆笑）PFF（ぴあフィルムフェスティバル）にはいつか応募したいとずっと思っていました。それに応募したら監督になれるような気がしていたんですね。

中澤 黒沢清監督や松岡錠司監督、篠原哲雄監督もPFFから出たんですね。

水戸 僕の場合、大学四年の時にまだ単位がいっぱい残っていて、両親にやめさせて下さいっていったんで

すけれども、とりあえずもう一年行きなさいと。その五年目の時グランプリを取りました。グランプリを取ったんで、やめさせて下さいと。それがやめさせてもらう手段でした。

東京に出て助監督とかになりたいと思っていましたけれども、それも親に反対されていました。その後、『脳の休日』でようやく映画祭オフィシアターでグランプリを取って、東京行きを許してもらったんです。賞がきっかけということになりました。

篠原哲雄監督の『月とキャベツ』（一九九六年）の助監督につきまして、現場で『ホームシック』で照明をやってくれた矢部一男さんに会いました。矢部さんは日活で小林旭と同期入社の人で、水戸ちゃんが映画を撮る時には只で行ってやるよといってくれまして。本当に来てくれました。鶴見さんもその時に知りあいました。

中澤 篠原監督との出会いは。

水戸 『ストレンジ ハイ』のグランプリで東京に行った時に、篠原監督のデビュー作である『草の上の仕事』（一九九三年）をたまたま観に行って面白かったんですよ。次の日、ぴあの会場で僕の映画をやる時に、篠原監督が会場にいらして、たまたま共通の知り合いがいて、紹介してくれました。そこからのお付きあいです。北海道にロケハンにいらした時に、僕の車でまわりました。

ぴあの賞金が百万円だったんですけれども、それで映画を作った時の借金を返して、残ったお金で上映会をやったんです。それで河瀬直美監督と篠原監督を北海道に呼んだんです。札幌では、二人の映画は初公開だったんです。それで、賞金がほぼなくなりました。

中澤 河瀬直美さんは『萌の朱雀』（一九九七年）でカンヌ映画祭でカメラドール（新人監督賞）を取った監督ですね。河瀬さんは、『脳の休日』で協力してくれた。

水戸 はい。

中澤 ですから、水戸さんは果報者というかね、ずいぶんいろんな人に協力を得ている。鶴見辰吾さんも、『ホームシック』の群馬ロケでは、自分で車を運転して駆けつけてくれたそうですね。

水戸 新宿集合ってなっていたんですけども、鶴見さんは自分の車で行くからと。それで、主役の小野原さんは群馬では出番がなかったんですけども、鶴見さんの大ファンで、しかも家が近所らしくて、横浜で待ちあわせて一緒に乗ってきたんです。群馬までも、鶴見さんが自分で運転してくれました。

中澤 鶴見さんにギャラは払ってるんですか。

水戸 いや、元々ノーギャラで頼んでいましたので。

中澤 『脳の休日』から『ホームシック』へという流れの中で、私なんかは、まあ血っていいましようか、家族ってどうか。それで、小津安二郎の名前を出したんですけども。ずいぶんと重いテーマが流れているのではという気がします。

一度観たくらいではなかなか分からないところがある。二度観ても、三度観ても分からないかもしれないという。相当知的な映画だと思いますね。難しい映画ですよ。

水戸 ちょっと説明不足。（会場笑）あと、なんか引きが引きすぎていたり。見えないじゃないかというくらい引いているかもしれない。これはいつも反省しているんですけども。

中澤

『ホームシック』はロードムービーでして、何人かの人間が、偶然一台の車に乗りあわせる。そのことによって、お互いの記憶が花火のように飛びちって、物語ることによって、流行り言葉だからちょっと嫌だけれども、まあ、癒されていくというわけですね。四人が夜の浜辺で火を前にそれぞれの過去、身の上を物語る。他の三人が熱心に聞いてくれると、でもそれは嘘です、となる。嘘でもいいんだと、とにかく話をすることによって恢復されるものがある、あるいはその嘘だけが本当のことなのだというように、私は思うんですけれども。監督はいかがでしょうか。監督がどう思おうと、関係ないというのが、私の立場でもありますが（笑）。

水戸

その場では嘘とってしまったけれども、本当だったかもしれないという。

中澤

だったかもしれない、ですよ。でも、嘘かもしれない。

水戸

回想シーンを映像でばっちり観せてしまって、泣かせどころみたいに作ってあるのに、それを嘘とってちゃう面白さみたいなことをやってみたかったです。

中澤

うん。それで結局、観終わった印象が非常にいい。泣くまではいかないけれども、ちょっと涙が浮かぶかなという、そういう映画だと私は思うですよ。ラストの中村老人と、明美（小野原亜希）の会話は「さあ、行こうか」、「どこへ行くんですか」、「どこだっていいさ」という。そのだいぶ前には、同じ二人がガス欠になって「行けるとこまで行きましょう」、「前向きですね」、「行けるとこまでしか行けないもんなあ」と話していました。映画や小説からメッセージを読むというのはあまりしたくないんですが、とても爽やかな終わり方になっていますね。

プロデューサーはどんなふうに見ているんですか。

波多野 解釈はいつでも仕様がないうで。

中澤 その仕様がないうことをいっててのが、私なんかの商売で（笑）。

波多野 『ホームシック』は、今日で私は六回目なんです。五回目に観た時に、やっと来たかなっていう（笑）

感じが実はある。プロデューサーの目で現場からやってくると、なかなか普通の観方は出来ない

中澤 さすがにプロデューサーで、何度も足を運んでいただきたいということでしょうか。私もフィルムで観たのは、今日で四回目でしょうかね。あと、何度かビデオで観ていますが。今日も泣けてしまったわけです。だんだん良くなるという気がします。

水戸監督の作品は非常に絵に凝っていると、常々私は思っていました。『ブラックリボン』の「オツケー、オツケー」の親指もその一例ですが（笑）。前に聞いたことがあるんですが、『脳の日』はとってもカット割りが多いですよ。その話も。

水戸 『脳の日』を撮る時に、僕が十六ミリのカメラを使ったことがないということ、なかなかいいカメラを貸してくれる人がいませんでした。結局、シアター・キノの中島洋さんからボレックスというゼンマイ仕掛けのを借りてきました。ゼンマイが二十秒くらいしか持たないので、全カット二十秒以内に収めて。そうすると、カットが多くなってしまった。（会場笑）

中澤 いい話ですよ。必要は発明の母なのかどうかは分からないけれども。絵コンテを描かなければ気が済まないタイプと、以前お聞きしましたが。

水戸 気が済まない、というより、絵コンテがないと現場で困っちゃうんですよ。なんか、どこからどこまでこのカットで行けるのかとか、そういうところを一度絵にしてみないと分からなくてですね。『脳の休日』でソファで父親と主人公が会話しているシーンは、本当は外のベランダで撮るはずだったのが、

雪が降ってきちゃって、中で撮らざるを得なくなった。それで、撮る前に絵コンテを描き直さなければならなくなって、ちょっと待って下さいと。描いてみたら、割り方は元の絵と同じだった。場所が違うだけで、そのまま撮ればよかったと。そんなこともありました。

中澤 映像は、事前に結構出来ているんですか。

水戸 そうですね。大体、おおまかには。

中澤 映像もそうですけれども、なおかつ言葉にこだわっていますよね。言葉でショットが切りかわったり。『脳の休日』では茶碗に「悲しみ」とか「喜び」とか書いてあったり。『ホームシック』では砂浜に「ありがとう」と書いてある。言葉の問題は、もっと話が膨らんでいくのですが、与えられた時間はあと十分くらいなので、会場の方々にもお話を聞きたいと思います。

水戸 その前に、『脳の休日』の女優さんが来てくれますので。

中澤 ああ、ではご挨拶を。前に出てきていただけませんか。

水戸 手紙を沢山書いていた女の子です。(拍手) お久しぶりです。札大の映画研究会で一緒でした。短大だったんで二年でいなくなりましたが、『脳の休日』の時はもう就職していたんですけれども、出てもらいました。ご挨拶を。

渡辺 自分の出ているところを初めて観ました。

水戸 フィルムで観るのは初めてでしたっけ。

中澤 渡辺泉美さんでした。どうもありがとうございます。(拍手)

水戸 あと、百円玉投げていた少年のお母さんが来てくれています。(会場爆笑)

中澤 百円玉で印象的な三浦耕さんのお母さんです。(拍手)

せっかくの機会ですから、会場の皆さんで監督に何か聞いてみたいという方はございませんか。

男性A 私は今札幌に住んでおりますが、以前旭川に住んでおりました、士別によく通っていたんです。そこで、監督の士別に対する思いを聞かせていただきたいのですが。

水戸 僕は三歳から高校を出るまでずっと士別におりました。実家は今も士別にありまして、撮影の時は実家に泊まっていました。撮影のために風景を探したわけです。長い道とかを楽しんだところがあります。士別は美瑛のようにきちっと決まる絵にはならないんですが、広くのっぺりとして、とらえどころのない感じなんです、そこがまたいいなと思っています。ほかの土地では、結構絵的に収まるところが丘だったり、画面が埋められる風景が多いのですが、士別はなんか物足りないような、寂しいような、空間が多すぎるような感じがありまして、逆に僕は気に入っています。

男性A 幌加内のあたり、深名線ですね。鉄道がとても印象的だったんですけれども。

水戸 そうですね。駅のホームに線路がないというのを撮りたかったんです。ロケハンの時に線路が途切れてしまっているところを見つけていて、それを撮影の前の日にもう一度確認に行ったら、レールが撤去

されてしまっていたんです。(会場笑) それで、慌ててあちこち探しました。JRに電話して、どこまで線路が残っていますかと聞いたんですけれども、実際には教えてもらったところよりも遙かに先まで作業が進んでいて、とんでもないところまで行ってしまいました。奥村さん演ずる中村の前にさえぎる柵があったんですが、引きすぎてしまったせいで、それが見にくくなってしまったのが、残念です。

中澤 老別という駅が出てきますね。おばあさんが無人の乳母車に子守歌を歌っている。

水戸 あれが朱鞠内の駅です。

中澤 老別から最後は士別へと。人が別れる(笑)。

水戸 士別駅はそのまま使うつもりだったので、それと呼応する名前を考えて、主人公が年をとっているとということで老別にしました。

中澤 監督は、そういった言葉に対する感覚が敏感ですよね。

水戸 士別の駅前で撮影していたら、トラックが画面に入ってきてしまって困っていたら、奥村公延さんがたぬき屋という蕎麦屋まで走って行って、トラックの運転手さんになってくれました。

中澤 監督は士別の親善大使でもあるんですけれども。ほかにどなたか。

女性A 主人公の女の子が、雨の中ぐしょぐしょになりながら歩く道路がありますよね。

水戸 はい。

女性A あれは士別から中士別の方に行く道ですか。

水戸 いや、あれは、幌加内の方の、今地名をど忘れしてしまったんですが、カタカナの名前の温泉があり

ますよね。そこに土別から向かう道です。

女性A

中村が山に囲まれたところで生まれたと聞いていますが、土別を考えていたんですか。

水戸

土別もたしかに山に囲まれています。もう少し小さい町を考えていました。

『脳の休日』に出てくるのが、ぼくの実家です。家の裏をすぐ線路が走っています。

女性A

ちなみに私の家はグリーンベルトのすぐ側です。

男性A

いいところじゃない。(会場爆笑)

女性B

ロードムービーですよ。武田鉄矢主演の『幸福の黄色いハンカチ』(一九七七年、山田洋次監督)とイメージが重なってしまっただけですよ。

水戸

ひろしという派手な車に乗っている男の子(小宮山浩)が若い時の武田鉄矢に似てるんですよ。(会場笑)

中澤

今日このトークに加わって下さるはずだった山口昌男さんがですね、去年の十二月にこの企画のご相談をした時に、即座にタイトルを「ノスタルジの不可能性」とおっしゃったんです。今日も土別の話でずいぶん盛りあげましたけれども、たしかにノスタルジは不可能かもしれないけれども、一瞬可能になったような幻想を見せてくれるというか。私は、水戸さんの映画はそんな映画だと思っているんですよ。そろそろ、時間も押してきていますが、会場に「暗闇のフラッシュバック」という映画論を『暗射』(虚数情報資料室)に連載しておられます笠井嗣夫さんがいらしていますので、何かご感想でもお願いできませんでしょうか。

笠井

初めて拝見しました。非常に面白かったです。いろんな分析が出来るんですけども、ぼくらの見方からすると、物語を作ってはそれを崩していくという運動のようなものが、『脳の休日』にも『ホームシック』にもあります。今、中澤さんが郷愁というものが見えてきたとおっしゃいましたけれども、実は見えてきているようで、それをうち消すというか、そういうところがとても面白かったです。ただ『脳の休日』の階段落ちにつきましては、物語を導入部で作っているという気がします。製作者としては面白いんでしょうけれども、見ている方としてはちょっとわざとらしいなという気がしました。あれなしで『脳の休日』を撮りきったら、すごく傑作になったんじゃないかなと感じました。

中澤

水戸さんの世界というのは、ノスタルジーというのもキーワードのひとつでしょうけれども、本質は黒いユーモアだと思うんですね。黒いユーモアというのは、同じ現象を見たり聞いたり体験しても、どこかで覚めているというか、あるいは自分がやっていることの結果がどこか見えてしまうというか、そういう感覚ですよ。せっかく作ったのに、それをわざわざ自分で壊してしまうというのを繰り返していき。だからハリウッド映画にはならない(笑)。さっぼろ映画サークルの榎田一恵さんもいらしています。何かお願い出来ますか。

榎田

『ブラックリボン』ですが、三池崇史監督の『DEAD OR ALIVE 犯罪者』(一九九九年)とどっちが先なんですか。

水戸

僕の方が先です。

榎田

じゃあ、三池崇史が水戸監督の真似をしたんですか。

水戸 いや、三池さんはたぶん見ていないと思います。(会場笑) それを教えてくれたのが、『ブラックリボン』のカメラマンをやってくれた上野さんという人で、あれを撮ってしばらくしてからなんか。

樫田 三池崇史が。

水戸 ぱくったかもしれない。(会場笑)

樫田 私は水戸さんがぱくったんじゃないかと思ったら、そうじゃなくて。(会場爆笑) それは先見の明がある。すごい。

女性B 手紙を書き続けている女の子なんかよく感じが出ていました。

中澤 今日はお見せ出来ませんでした、『ストレンジ ハイ』には気持ちの悪い男のストーカーが出てきます。

水戸 あれは大学二年の時に撮ったんですが、当時まだ、ストーカーという言葉は流行ってなかったんです。

中澤 ストーカー現象を先どりしていた(笑)。いやあ、すごい映画です。私はゼミの学生たちに『ストレンジ ハイ』を観せました。彼女らは、そのストーカー学生のキャラが立っているといっておりました(笑)。時間ももう七、八分超過してしまいました。私は北海道北海道といってなんでもありがたがるのは嫌いなんです、土別、そして札幌大学出身の水戸監督にはもっともっと大きくなってもらいたいと念じております。今年も、予定としては撮るんですよ。

水戸 予定としては。

中澤 周防正行監督の『Shall we ダンス?』(一九九六年)を製作したアルタミラ・ピクチャーズ

というところで撮る予定になっていたんですけど、いよいよメジャー・デビューですね。

水戸 チャンスはいただいているんですが、なかなか本が出来なくて。

中澤 応援しましょう。今日は山口昌男さんが急に欠席ということで大変失礼いたしました。それでも、ずいぶんと盛りあがったんではないかと、進行役としては満足しております。どうもありがとうございます。最後に水戸ひねき監督に大きな拍手をお願いいたします。(拍手)

水戸ひねきフィルムモグラフィ

監督作品

- 『ストレンジ ハイ』 1993年／8mm／60分
- 『有名な秘密』 1993年／ビデオ／15分
- 『脳の休日』 1996年／16mm／20分
- 『白い恋人』 1996年／ビデオ／4分
- 『ブラックリボン』 1999年／ビデオ／5・5分
- 『ホームシック』 2000年／16mm／60分
- 『有償ボランティア』(A、B、C、キャスト違いで同内容) 2001年／ビデオ／各25分
- 『ああ、大江戸線』 2002年／ビデオ／30秒
- 『恋は致命傷』 2002年(製作中)／ビデオ／7・5分

出演作品

映画

- 『洗濯機は俺にまかせろ』1999年、篠原哲雄監督
『きみのためにできること』1999年、篠原哲雄監督
『はつ恋』2000年、篠原哲雄監督
『スリ』2000年、黒木和雄監督
『死者の学園祭』2000年、篠原哲雄監督
『とらばいゆ』2001年、大谷健太郎監督
『不思議めがね』2002年、三村渉監督

自主映画

- 『ストレンジ ハイ』1993年、監督兼
『Happy Go Lucky』1994年、小笠嘉士監督
『ナイトウォッチ』1996年、三宅隆太監督
『白い恋人』1996年、監督兼
『久我山一週間』1998年、田部宏太郎監督
『三人の男』1998年、田部宏太郎監督
『氷や』1998年、福島龍治監督

『寄り道』1999年、田部宏太郎監督

『俺たちの川く濁流編』1999年、近藤太監督

『アルバイト』2000年、福島龍治監督

『ポン刀さん全身全霊』2002年(製作中)、白石晃士監督

『近未来蟹工船 レプリカント・ジョー』2002年(製作中)、松梨智子監督

『君にありがとう(仮)』2002年(製作中)、山岡大祐監督

『彼女の場合』2002年(製作中)、小笠嘉士監督

ドラマ

『Bubble In The Night』1999年、岩橋直哉監督

オリジナルビデオ

『怨念く呪われた証券マン』1996年、金澤克次監督

『ほんとにあった! 呪いのビデオ3』1999年、中村義洋監督

CM

『サントリーウィスキー』1999年

『CoCo老番屋』(地方限定) 1999年

『エプソン・インターカラー』2000年

『コンタクトWeb』(不明) 2000年

『アイフル』 2000年

『マクドナルド』（地方限定） 2001年

付記 本稿は、二〇〇一年二月三日に北海道立文学館（札幌市）で行われた新進映画監督映像作品鑑賞会「水戸

ひねきの映画を観る！ 聴く！」の後半に行われた鼎談の記録である。